

戦没画学生たちの切なき青春の叫び「無言館」と 青春を特攻隊に捧げた「平和記念館」

38期 大橋良造

この夏の初めに旬日の間を明けて一度は訪ねたかった使命感に苛まれ早やる気持ちを、芦カレ38期の旅行の会のメンバーと信州、上田の戦没画学生の残していく絵画を所蔵する無言館を訪れた。一方、ここから千キロ以上遠く離れた鹿児島県のJR最南端北緯31度11分の近く知覧にある沖縄戦で、乗れば片道の燃料しか搭載していない死を覚悟の上で飛び立って行った二十歳を前後したまだあどけなさの残る少年達、青年達の若い雄姿の姿に自分の歳より少し差のある青少年達の御國の為にと父母兄弟姉妹に見送られて飛び立って行ったその遺影を見て、この戦争が今日の平和の礎となった、今年80年の歳月に改めて感慨深さを身に沁みた旅だった。

信州、上田の緑滴る山里にこの無言館は志半ばにして散っていました画学生の慰靈を目的として1997年に開館した。この戦争さえなければ豊潤な人生が明日へと繋がったであろう切ない気持ちがこの森は語りかけている。その中の一枚「裸婦」の前に立つ、生きて帰りこの絵の続きを描きたい、その言葉を残して戦場へと飛び立っていた画学生の日高安典さんの切なる言葉がグサリと胸を突く。「兵営日記」と題したノートの言葉に

——秋立つ鳥の飛ぶ方をみよ 秋立ちていつ帰りこん迷い鳥 秋立ちていつ帰り
こんツントラの苔

最大の激戦地、フィリピン、バギオでの彼の壮烈な戦死を前での言葉らしい。

戦争とは世の条理を狂わすもの。

一方、「知覧」薩摩藩の外堀の一つがここに置かれ、本丸鶴丸城の護りに当たっていたところ。その地に地獄の知覧と呼ばれる特攻隊の兵舎が作られた。一部を水口文乃著の「知覧からの手紙」より転載、

——特攻隊員の一人、穴沢利夫少尉(享年23歳)は出撃するまで三角兵舎と呼ばれた宿舎で寝起きをしていた。敵機にわからないよう出撃の三日前から兵舎は松林の間に点在していた。その彼が最後まで想いを抱いていた一人の女性に、あなたがために純情一路に生き抜けたことを嬉しく思いながら征ける幸せ者であったと書き送っている。出撃する若い特攻隊員達に小母さん、小母さんと母のように慕われた富屋食堂の鳥浜トメさんが、泣く子も黙る憲兵というその当時の存在を尻目に後の世の今まで知覧の大きな存在であった。



無言館



平和記念館の零式艦上戦闘機





三角兵舎



富屋食堂



【今日われ生きてあり】
神坂次郎

知覧一。
薩南の涯の山のなかの静かな町。
と号(特攻)要員とよばれた若者や少年たちが
青春の最後の幾日かを過ごした町。
祖国の難に一命を捧げた隊員たちの特攻機
が、二百五十キロの爆弾を抱えてよろけるよ
うに飛び立つていった町。
そんな隊員やそれを取りまいた人びとのさ
まざまな思いがこめられている町、知覧。